

エジプト駐在武官

日誌(8)

あるジャーナリストの殉職

榊枝 宗男 陸自75

「入江君がルワンダ難民救援隊の自衛隊を取材中に亡くなった」と深夜、突然の電話に驚いたのはカイロの自宅であった。旭川から派遣された自衛隊の240名がアフリカのザイル・ゴマへ派遣されている最中である。

入江敏彦氏(32歳)は当時、フジテレビカイロ支局長として、夫人と6歳、1歳の息子さんたちを伴って赴任していた。エジプトにおける私の親しい友人であった。

ケニアのナイロビの地方空港から離陸したセスナの小型飛行機が、エンジンの不調により空港へ戻るとの連絡を最後に、消息を絶った。入江氏がチャーターし、これまで何回も訪れている自衛隊のゴマ宿営地へ取材に向かう途中の出来事であった。

ただちに捜索隊がナイロビ近郊のゴングヒルと呼ばれる丘陵地帯の墜落現場へ行く。ここでは、送電線に接触し散乱した機体と、識別が出来ない五つの遺体が発見された。若いケニア人のパイロットの飛行時間は、まだ60時間程度であったという。

翌日、私は航空自衛隊のC130輸送機で、ナイロビからゴングヒル上空を通過する際、コクピットで合掌した。

以前、幾度も彼のカイロ支局長兼自宅

筆者撮影



ザイル・ゴマ空港に到着した空自C130輸送機

アパートで、酒を片手に濔岸戦争当時、イラク国内の空襲を現地から数多くの中継を送り続けたことや、モザンビークの自衛隊PKOを精力的に取材した経験を熱く語ってくれたことを思い出した。

日頃から、危険な取材に備えて体力を付けておきたいと、ジョギングや自転車で身体を鍛え、奥さんの伸子さんには、「取材現場で何があっても必ず帰ってくる。心配するな」と言い聞かせていた。そんな彼が命を落とした。

ゴマ宿営地では正門の横にあるプレス用テント内に、広報幹部上口2佐が創った手作りの祭壇に、入江君のひげ面の似顔絵が掲げられていた。

自衛隊のルワンダ難民救援隊派遣任務終了の陰に、命をかけて自衛隊の活動を取材したジャーナリストの存在を、私は忘れることが出来ない。